

現代版風土記のススメ

—工業都市 群馬県太田市の文化資産利活用提案を例に—

太田風土記

京都芸術大学大学院

芸術環境専攻 学際デザイン研究領域 修了生

岩井秀樹・板橋嶺・栗原正博・鶴岡優子・真殿修治・村井裕一郎

2022年9月10日

関東都市学会 発表資料

研究背景と目的

- ・ 発表の目的
- ・ 共同研究者と発表者

研究方法とプロセス

- ・ 風土記について
- ・ デザイン思考について
- ・ 『太田風土記』の構成
- ・ 研究プロセス

研究結果

土の章：歴史を含めた観察と共感

月の章：問題提起

風の章：個別課題についての観察・共感・問題提起・プロトタイプ作成

地の章：統合することで地域全体のプロトタイプと未来像作成

今後の展開

- ・ 太田市長への報告結果
- ・ 今後に向けて

太田風土記

工業都市における文化資産の利活用を考え、 「現代版風土記」として社会課題の解決を提案する

太田市は自動車産業を中心に発展してきた工業都市である。産業構造の変化への対応、中心市街地の衰退、多様化社会の実現といった社会共通の課題を多数有している都市である。

京都芸術大学大学院 芸術環境専攻 学際デザイン研究において、我々のチームは太田市の社会課題を解決することを念頭に調査を実施した。

調査では市固有の歴史的な文脈（時層）に着目し、保有している地域の力を特定した。それは「自助で興す力」である。この失いつつある地域の力を取り戻すため、地域にある文化資産の利活用を考察した。地域の文脈から特有の課題を見だし、文化資産の利活用といった解決策を現代版風土記『太田風土記』として編集し、太田市長への提案の機会を得た。

本大会では『太田風土記』の取り組みを紹介し、都市における課題特定や研究の手法の一つとして、現代版風土記の活用を提案したい。

京都芸術大学大学院 芸術環境専攻 学際デザイン研究

「歴史ある対象を文化資産として利活用する方策を創造する（野村朋弘ゼミ）」 一期生

『太田風土記』は社会人6名の共同研究と個人研究を合体した研究成果である。

太田市民ではなく、地域研究以外の様々なバックグラウンドを持つ研究チームの視点で取り組んだ

『太田風土記』について、本大会では研究チームを代表し鶴岡・村井・真殿が発表する。

名前	プロフィール	個別研究
岩井 秀樹	i・social design代表。福島,神奈川の2拠点で教育,地域活性化,企業のイノベーション支援に携わる	産業再生基盤としてのシビックプラウド醸成の可能性について
板橋 嶺	建築家、末端建築デザイン事務所主宰。フィジカル建築と空間インターフェースの融合を目指す。埼玉県在住	中心市街地活性化に向けた公共空間の在り方
栗原 正博	創作書道家、ランドスケープの研究者、高校教員、某市教育アンバサダー。教育・スポーツ・地域活性に関心。群馬県在住	群馬クレインサンダーズを応援する高校生コミュニティづくり
鶴岡 優子	アート、スポーツ、スタートアップをテーマにPR・取材執筆。地域ブランディングの在り方に問題意識。千葉県在住	地域ブランドとしての太田ニットの可能性
真殿 修治	金融系研修会社社長。奴隷労働などと海外から揶揄されることもある外国人労働者に問題意識を持つ。千葉県在住	太田市における外国人就労者向けリカレント日本語教育について
村井 裕一郎	中小企業製造業経営。地域格差・地方と首都圏、ブルーカラーとホワイトカラーの『分断』に問題意識を持つ。愛知県在住	地域文化の担い手としての中小企業経営者の地元帰還について

「風土記」を研究成果とするプロセス



地域の選定

共同研究 (4~8月)

個人研究 (9~11月)

共同研究 (12~1月)

風土記の完成

京都芸術大学大学院学際デザイン研究領域では「旧きを知る文化・伝統の探究力」と「現在～未来を構想するデザイン思考」の両面から社会課題に対してアプローチする。

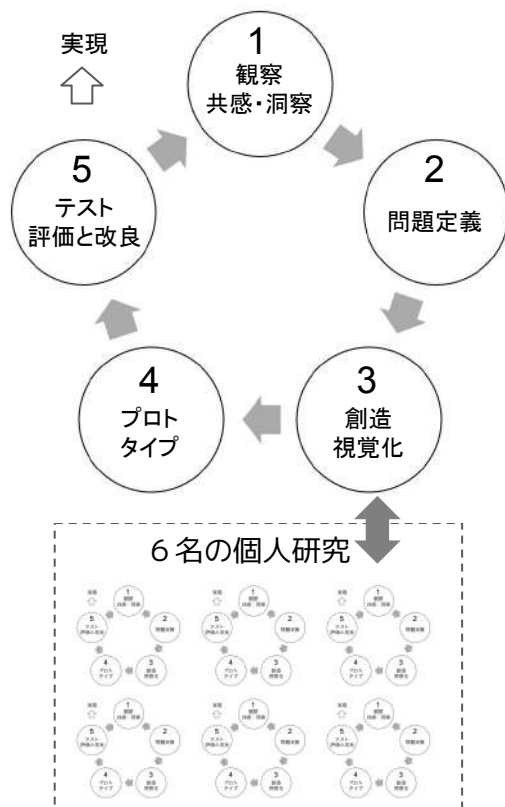
2年次の野村朋弘ゼミではデザイン思考を踏まえつつ、チームで特定の地域を調査研究を行う。共同研究、個人研究、共同研究の流れで進め、最終的に地域の「風土記」を研究成果として提出する。

「風土記」といえば奈良時代に編纂された『播磨国風土記』などが知られているが、本ゼミにおける「風土記」のまとめ方は各チームの工夫に委ねられている。

我々は群馬県太田市を調査対象とした。共同研究で歴史的な文脈を探り、市固有の「地域の力」と課題を特定した。中盤の個人研究では課題解決のアクションプランを立案。最後に共同研究でそれらを統合し、一連の調査考察を『太田風土記』としてまとめた。

デザイン思考のプロセスを活用

『太田風土記』共同研究



出典 「デザインへのまなざし」早川克美

『太田風土記』では風土記全体がデザイン思考プロセスを踏まえつつ、「3 創造」の部分で個人研究が組み込まれる。6名の個人研究はそれぞれがデザイン思考を踏まえて進行する。

観察はWebアンケートなどの定量調査、フィールドワークなどの定性調査を実施。集めたデータはKJ法などで分析、解釈することで問題定義を行う。問題解決のためのアイデアは、概念の図化、ワークショップ、サンプルなどで視覚化。プロトタイプでテストを行い改善を重ねることで、問題解決のためのアイデアに磨きをかけていく。

本研究では前頁の風土記に加え、デザイン思考という2つの方法を活用することが求められているが、型重視の研究ということではない。研究者自身の問題意識と現地の声を照らし合わせながら、対象地域の固有性をあぶり出すための道具として活用した。

『太田風土記』は土、月、風、地の4章で構成。

土と月は歴史から紐解く地域の特徴と課題、風と地は未来へ向けたアクションプランである。

題字と土月風地の文字は、共同研究者である書道家 栗原正峰氏が甲骨文字で表現した。

歴史からのアプローチ

未来へのアプローチ

土の章



歴史的な文脈（時層）で
地域の特徴を探る

月の章



陰の部分に注目
「地域の力」を特定

風の章



文化資産の
利活用提案

地の章



アクションプラン
として統合・提案



個人研究の中でも
デザイン思考を活用

太田市を代表するような古墳や城・建築物等の文化資産だけでなく、イオンやロードサイド店、外国人労働者なども住民には太田市の風景であり、いずれ太田市の風土となっていくのではないか。このような視点から本研究では評価が安定している文化財ではなく、ごく身近にあるもので住民が利活用可能なものを選び活用方法を探った。

太田市の文化財

太田市には国の史跡に指定されている東日本最大の古墳「天神山古墳」や、戦国時代に造られた国指定史跡「金山城」など数多くの文化財がある。市内の指定文化財等は国登録文化財4件を含め199件。

※令和元年10月29日現在



「金山城」鶴岡撮影

『太田風土記』における文化資産

日常的な地域の営みもまた、太田市の文化を未来へつなぐ重要な役割を果たすのではないか。我々チームでは「地域の力」を取り戻すために利活用できることを条件に、見過ごされがちな身近なものから選定した。



中小企業や地場産業



プロバスケットボールチーム



ブラジル人コミュニティ

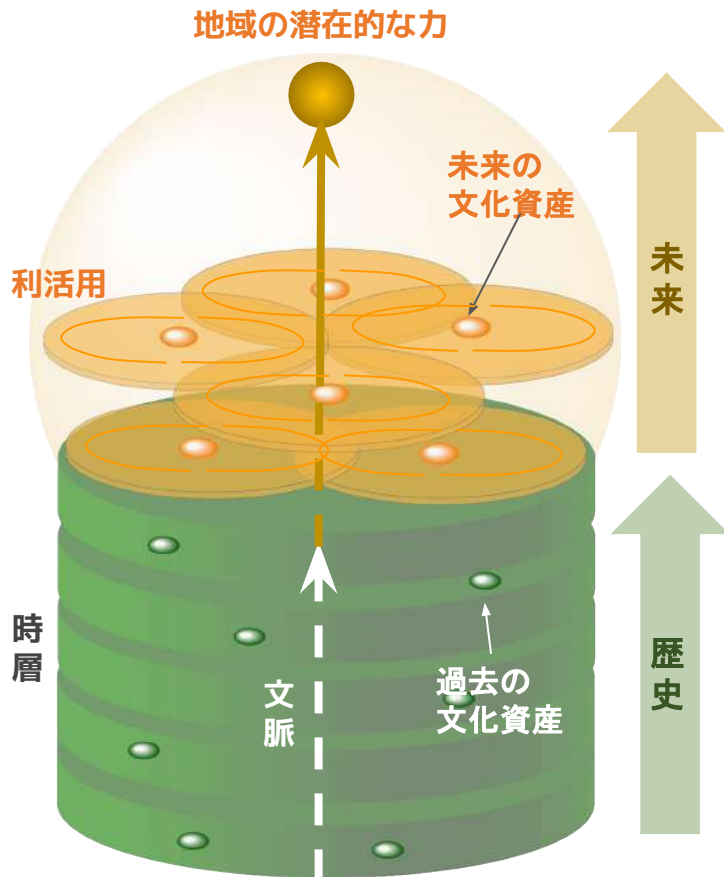


産官学民連携や公共建築

研究プロセス

未来への提案	地	12	歴史から未来へ。風土記完成
		11	地域の提案集として整理
		10	課題への効果を確認
		9	個別提案を統合
個別研究	風	8	提案の相互フィードバック
		7	課題に対する提案を整理
		6	現地調査および考察
		5	課題への個別研究の立案
歴史から考察	月	4	「地域の力」と課題を特定
		3	陰の特徴を文脈（時層）で考察
	土	2	比較による特徴の発見
		1	特徴を文脈（時層）で整理

研究プロセスのイメージ



土の章

—太田の風土を歴史からひもとく—

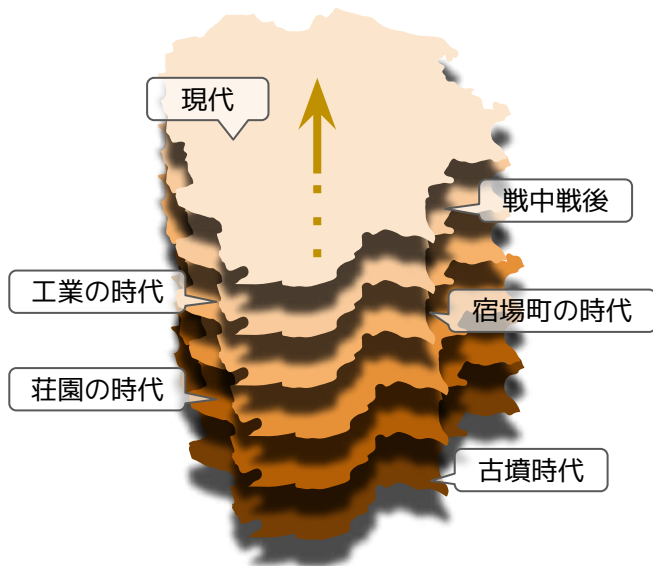


土：「土からはじまる」
土を丸く固めて立てた形。土主（どしゅ：土地の霊）を表す。
太田の歴史に眠った力（土主）を掘り起こす章。

歴史の積み重ね = 「時層」

現代に表出している太田の特徴だけでなく、**長い歴史の積み重ね = 「時層」**ごとに地域の特徴を調査考察。「時層」は江戸時代といった一般的な区切りではなく、地域にとって特徴的な時代を設定した。

<イメージ>

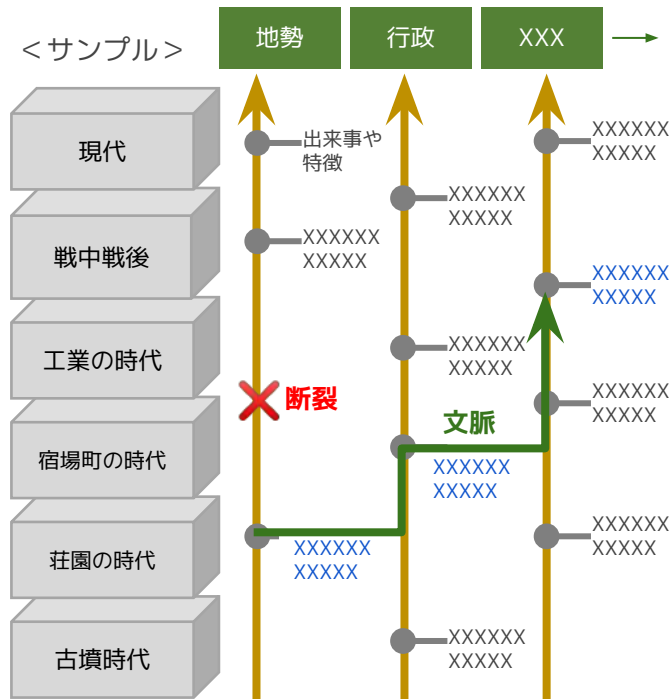


※時代による行政区域の変化も踏まえる

時層の基本フレームワーク

縦軸に時層を横軸には分野や地域を設定し、時層ごとに起きた出来事や特徴を整理。また、断裂や、分野を跨いだつながりを分析することで**歴史に埋もれた地域の文脈を考察**した。

<サンプル>

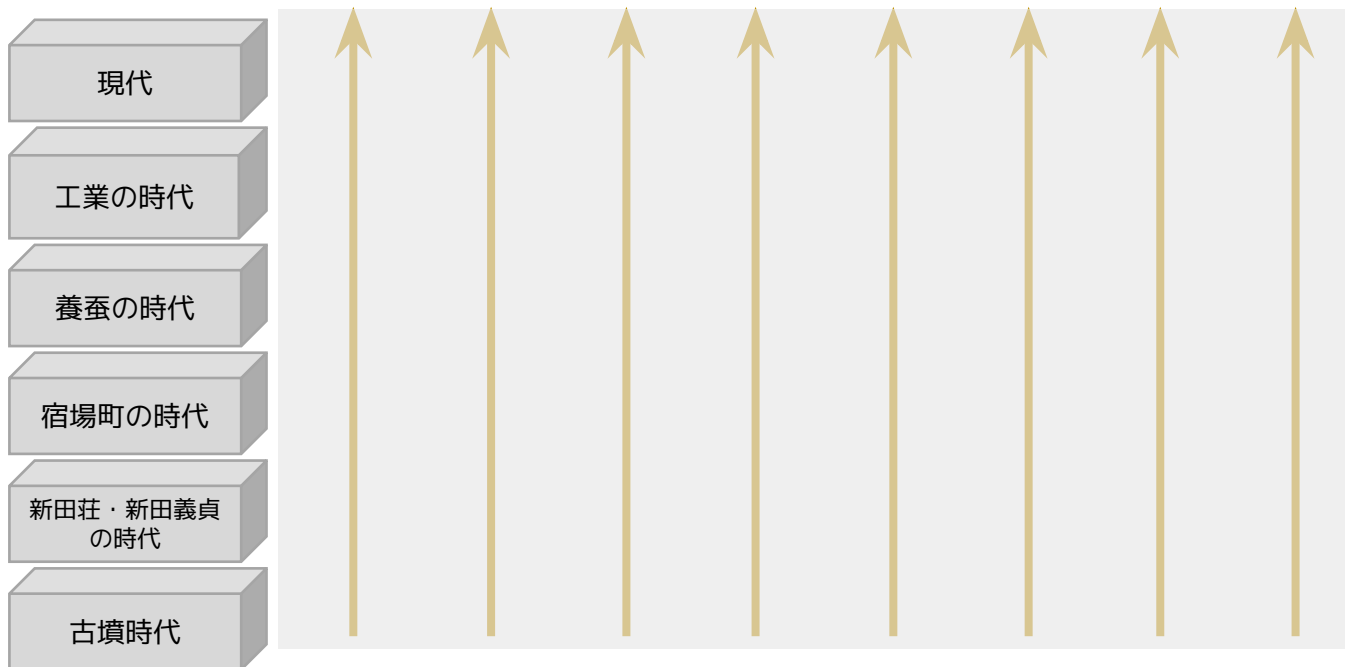


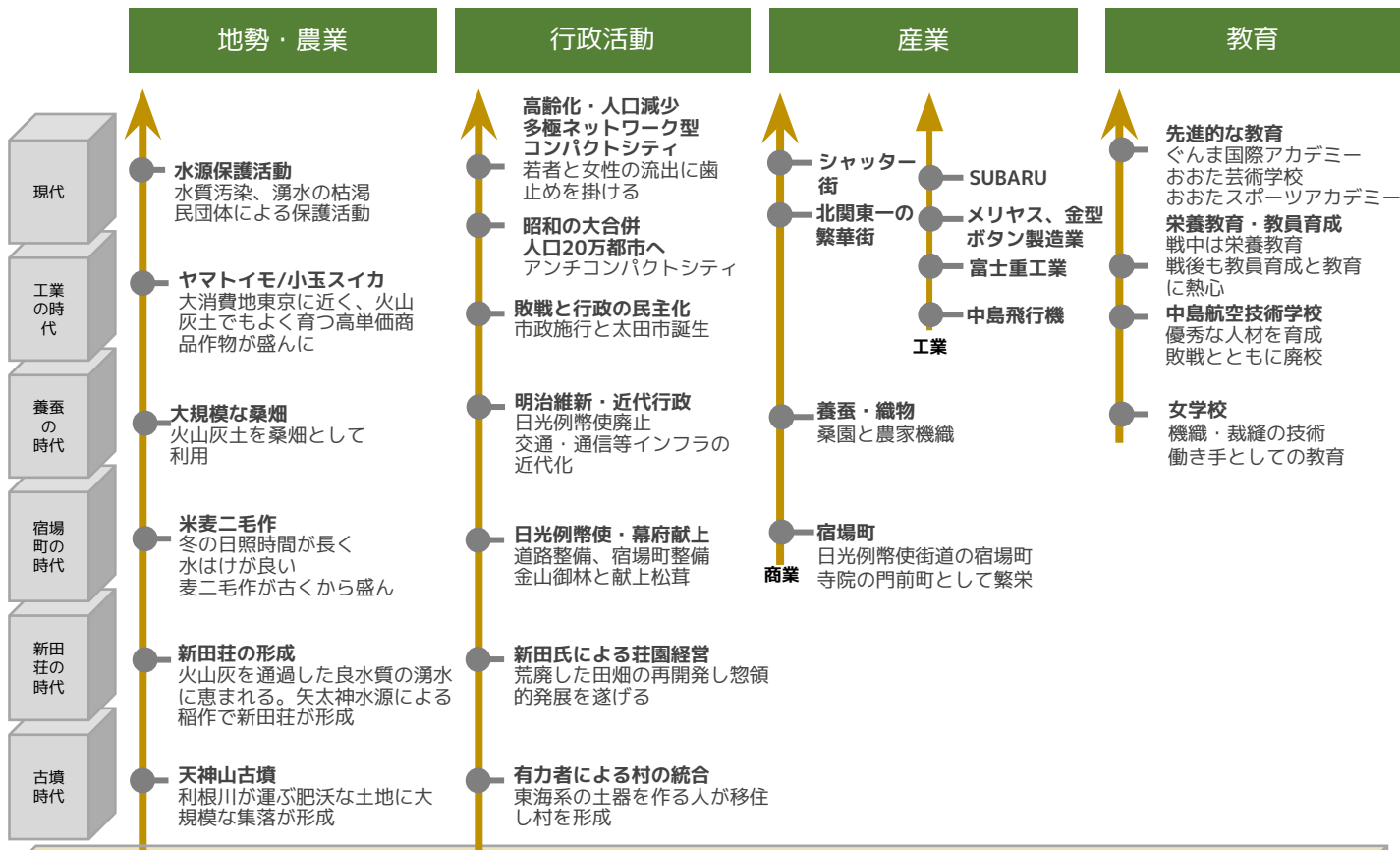
太田市を研究する上で重要になる6つの時層（縦軸）と8つの分野（横軸）を設定した。

8分野を設定

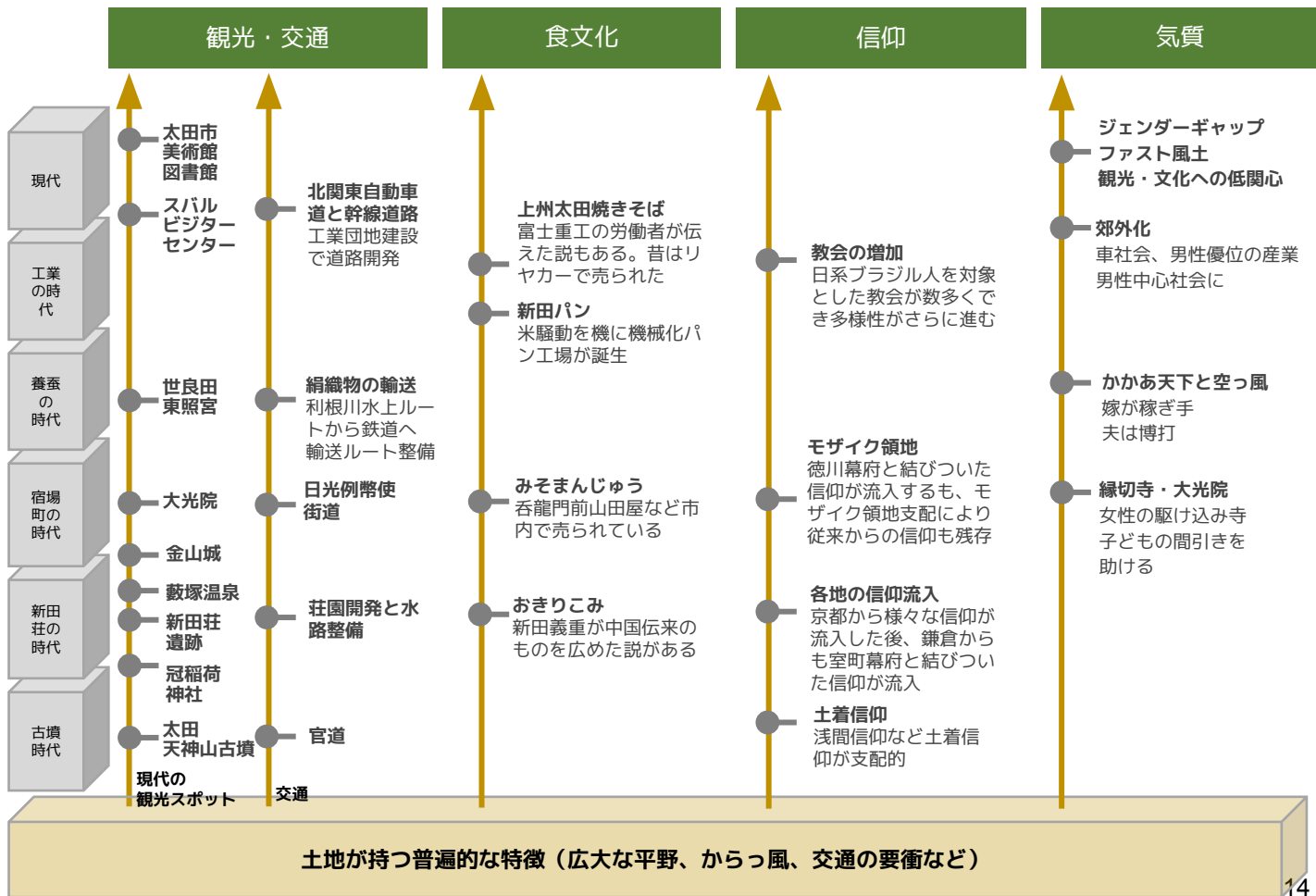


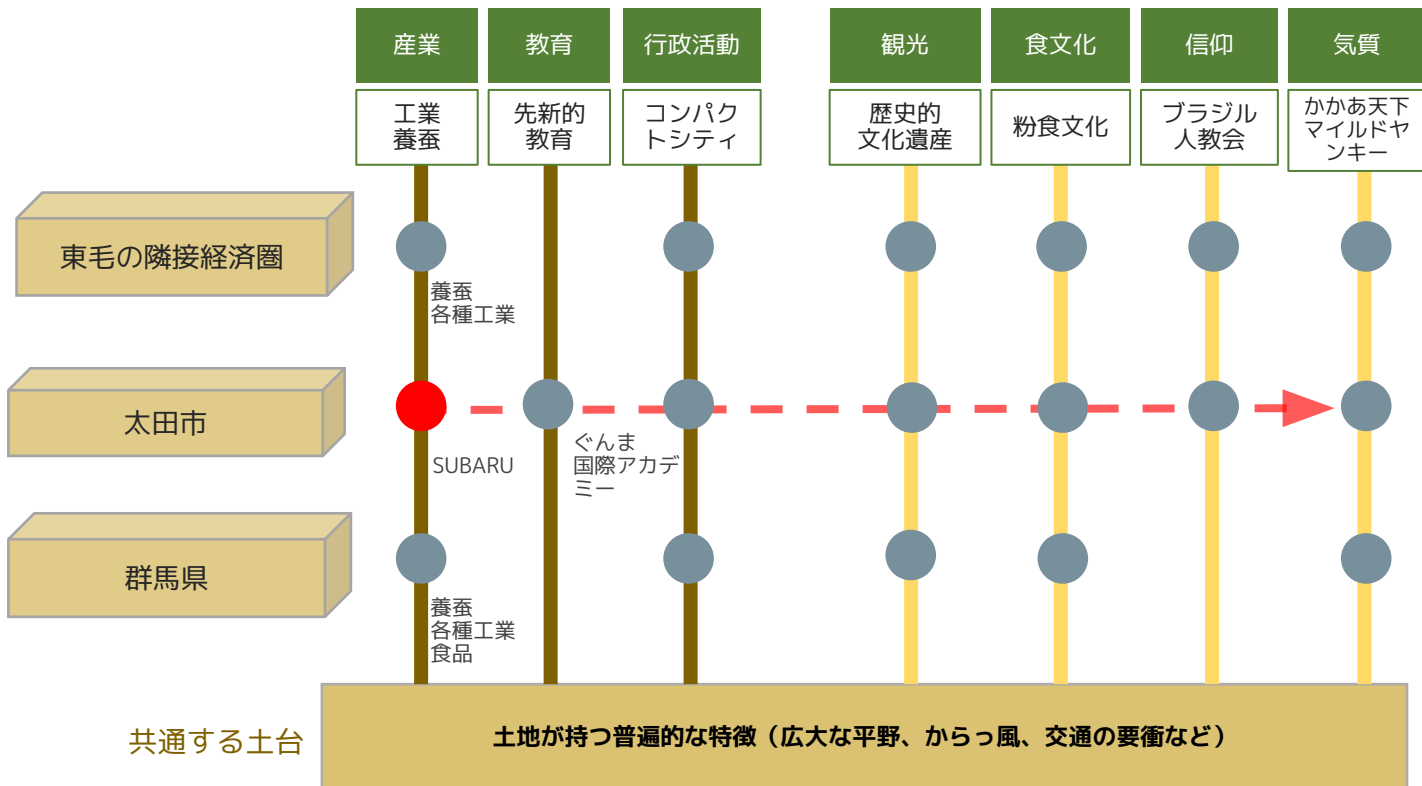
6
段
階
に
設
定





土地が持つ普遍的な特徴（広大な平野、からっ風、交通の要衝など）





太田市の特徴である「養蚕」「粉食」「かかあ殿下」などは、群馬県、隣接経済圏にもあてはまるため、太田市固有の特徴とまでは言い難い。太田市は自動車産業が最も大きな特徴であり、この特徴が行政活動、教育などさまざまな分野に影響を及ぼしていると考えられる。

月の章

—太田の陰を見つめる—



月：「跳月（ちょうげつ）」
飛び跳ねるような勢いのある月を表現した。
太田の光のあたらない部分を照らし、前向きな力へと変換する章。

デザイン思考における「観察/共感」のプロセスにあたるフィールドワーク。
2021年はコロナの影響が大きかったが、チームで計10回以上の現地調査を行った。



- 巨大すぎるSUBARU
- 「文化的な太田駅北口」と「歓楽街のある太田駅前南一番街」
- 「グローバル教育」と「歓楽街と隣接する小学校」



巨大なSUBARU

北口美術館図書館

文化的な北口



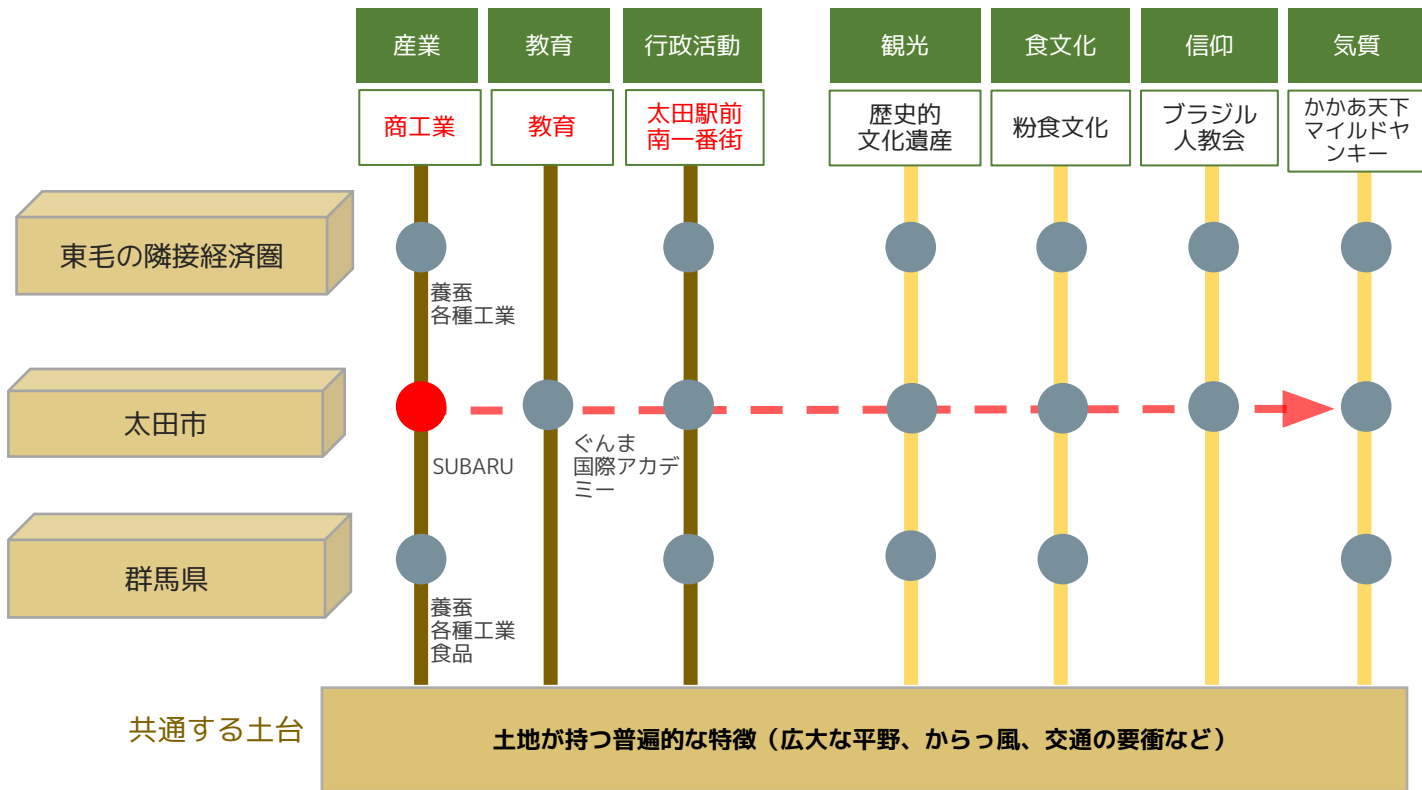
太田駅前南一番街

歓楽街と小学生

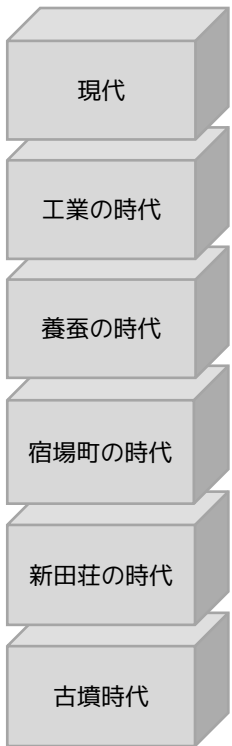
歓楽街の南口

違和感の原因を探るため、次の3つに絞り追加調査と考察を実施した。

- ① 産業（商工業） ② 教育 ③ 太田駅前南一番街



歴史的な文脈から読み取る「地域の力」
 政治・戦争・災害の影響を受けながらも働く人を自分たちで育成し、
 “興す力”でたくましく立ち上がってきた。



時代の変化

EV、自動運転
シェアリング

空襲・敗戦

生糸輸出減少

明治維新で
宿場町廃止

噴火で田畑が
壊滅的被害



産業



教育

ぐんま国際
アカデミー

技術者養成

女学校

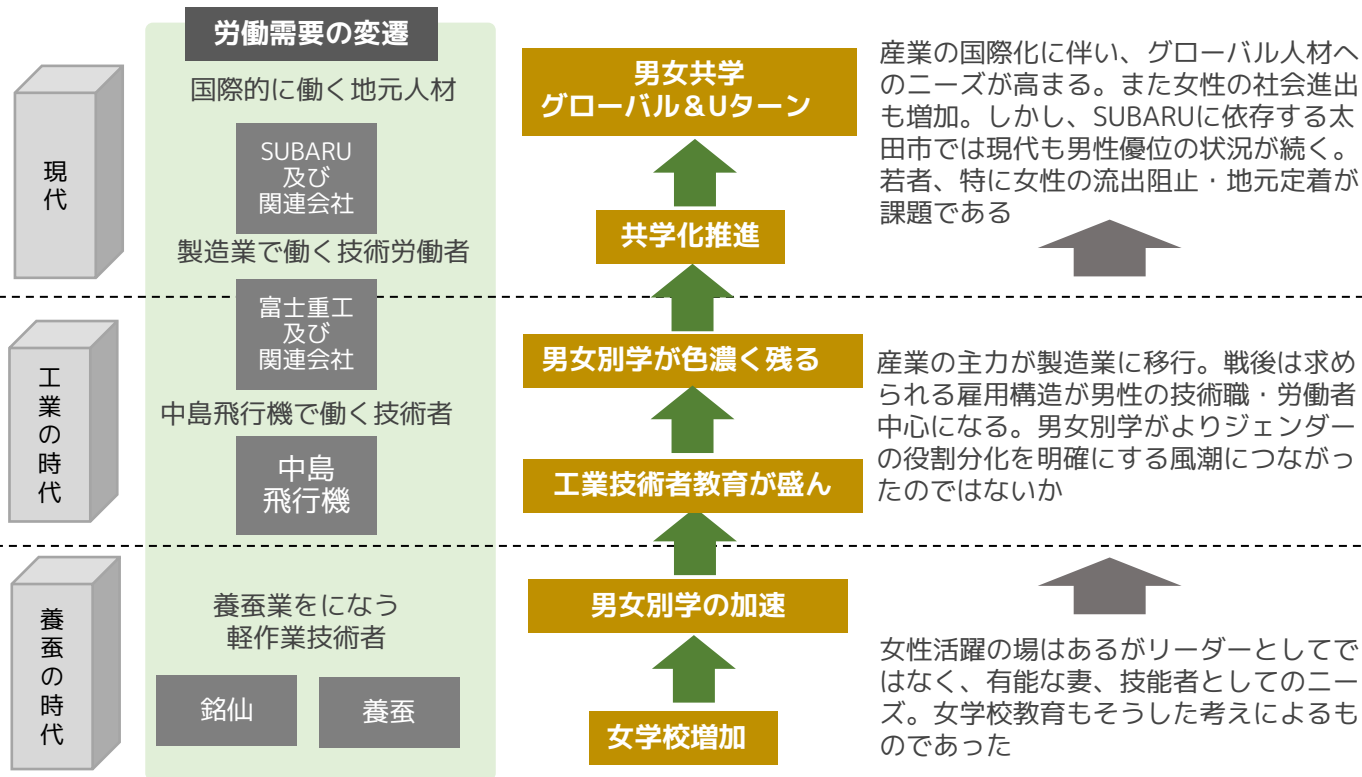
気質

ベンチャー
精神

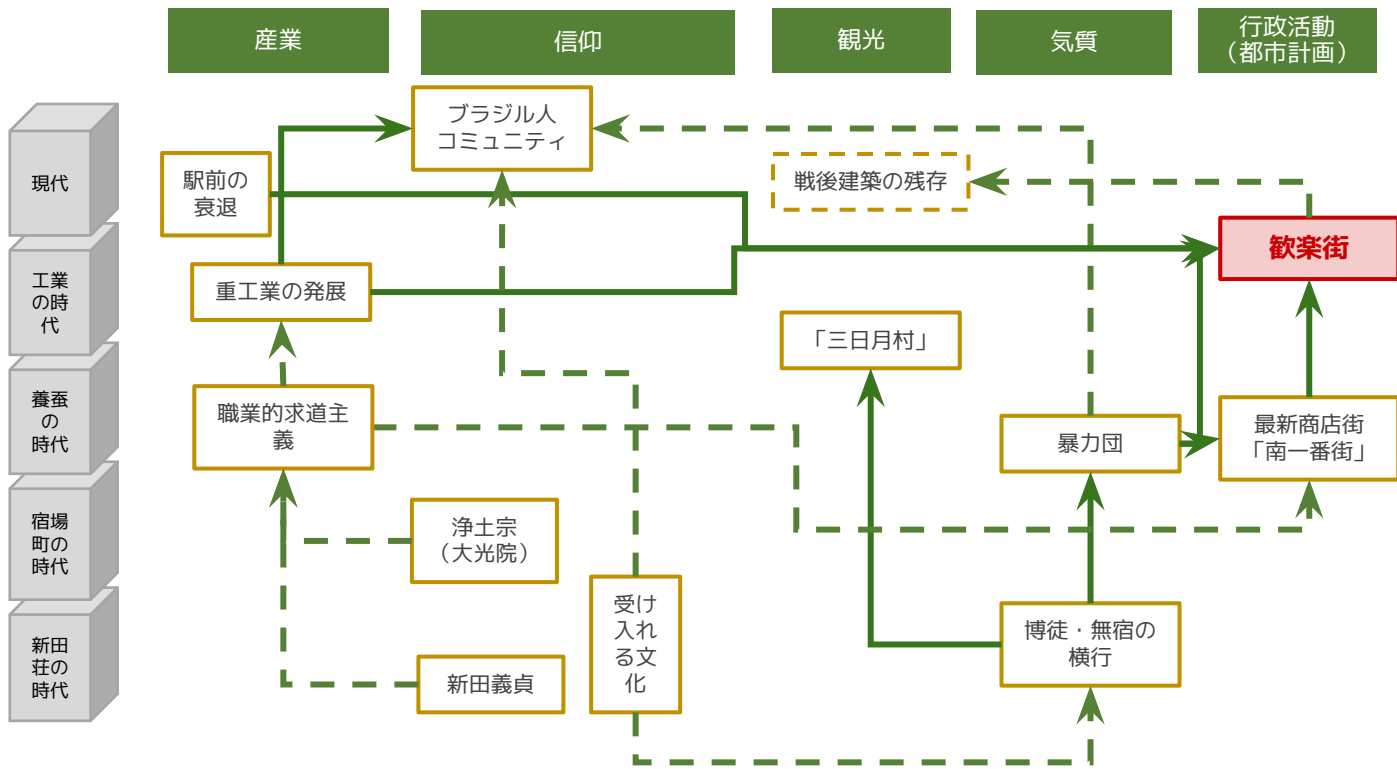
かかあ天下

宿場町・門前町での事業や養蚕(小売)、昭和期の商業発展など “小売で商いを興す力”
 +
 中島飛行機、SUBARUの企業城下町として発展する過程で培った “技術で商いを興す力”

太田市の産業発展に通貫する「地域の力」



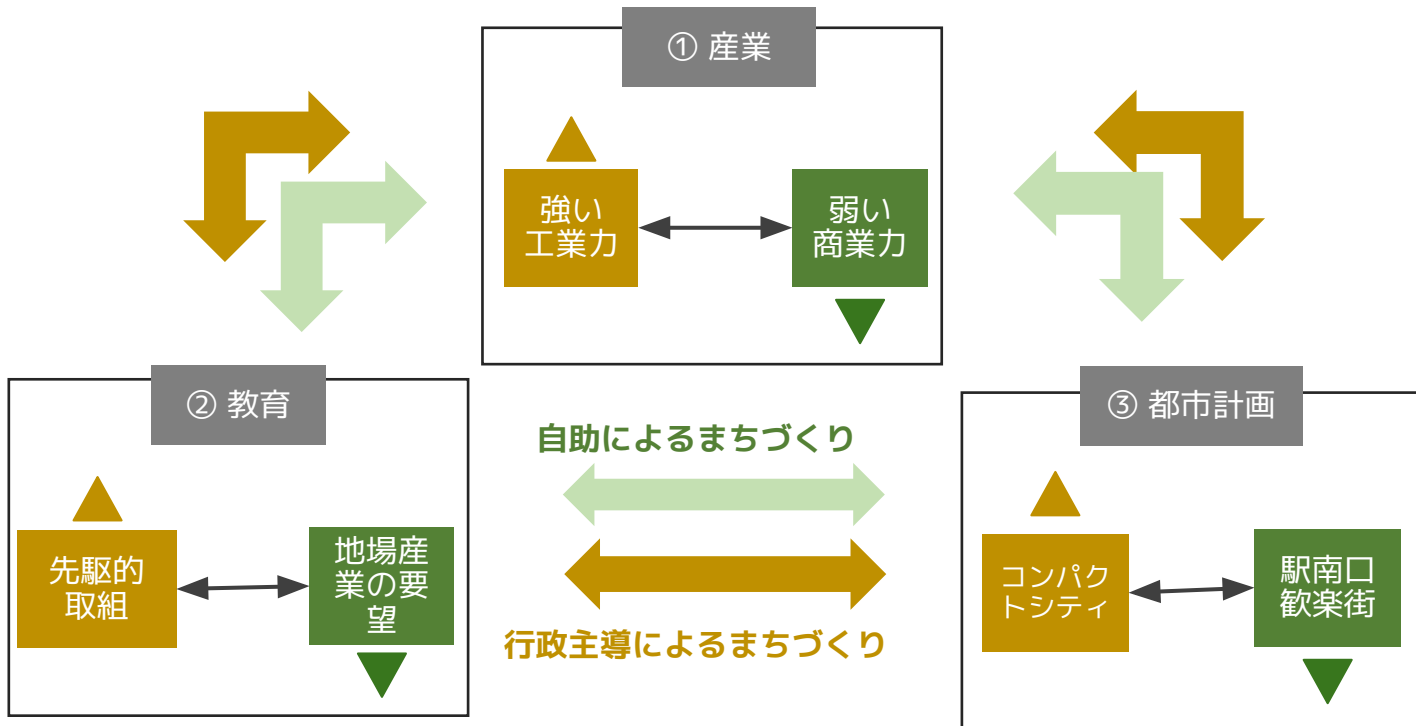
養蚕の時代の女性教育はあくまでも「技能者」としての教育であった。男性が活躍する中島飛行機の存在、および男女別学による仕事の分業化が明確となったことで太田市のジェンダーギャップをより加速させた。「働く人を育てるための教育」を推進してきた太田市では、現在はSUBARUに依存するかたちでその特徴を残している。



太田駅北口はロータリーが整備され太田市美術館・図書館がある美しい駅前である。一方、駅南側には歓楽街があり1階のシャッター街化が進む。

もともと南口一番街は1960年代に民間主導、自助努力によって開発された先進的な街づくりであった。重工業発展に伴う夜の余暇を過ごす場として、また職を失った外国人労働者の流入なども影響し歓楽街となった。これが暴力団の収入源となっていたともいわれている。

太田市ではプラス面とマイナス面の対比関係があり、矛盾や問題を起こしている。



歴史的に「自助で興すまちづくり」で発展してきたが
現代はSUBARU中心を前提とした「行政主導のまちづくり」
GAPのある二重ループ構造が太田市の特徴

眠っている
太田の力

太田市は養蚕、宿場町の時代は、仕事、生活、教育のバランスの取れた地域であったが、現在は世界的企業のSUBARUを中心とした重工業と、小売りを中心とした商業・サービス業などのバランスが不均衡な都市になり、都市計画や教育など様々な面で**不均衡が顕在化**している。

SUBARUが中心であることを前提とした、行政主導の「ものづくり」偏重の街づくりは、さらには中島飛行機に代表されるような**“自助”**、行政によらない民間の力で、**“興す力”**、すなわち、新たな事業や計画を始動する力である『**自助で興す力**』を**失わせてしまっているのではないか。**

自動車業界は大きな転換期にあり、加えてSUBARUは米国での売り上げが70%という脆弱性を有していることを鑑みると、地域の潜在的リスクは高まっているが、税収等に余裕がある現在は変革を行うチャンスでもある。

未来に向けた
問い

商業・サービス業中心に地域の有形・無形の資産を活かしながら**自助で興す力**を取り戻し、重工業とのバランスを是正することによって、都市計画や教育など多方面にポジティブな影響をもたらし、持続的な地域の発展を促すことができるのではないだろうか。

風の章

—未来の文化資産を考える—



風：「風神」

鳥形の神（風神）の形。鳳を意味し、帝の使者として往来する。

風はその羽ばたきによって起こる。

太田に吹く新しい風となるように、提案を行う章。

商業・サービス業中心に地域の有形・無形の資産を活かしながら**自助で興す力**を取り戻し、重工業とのバランスを是正することによって、都市計画や教育など、多方面に影響が及び、持続的な地域の発展を促すことができるのではないかと？



自助で興す力を取り戻すための3つのアプローチと個別研究

■ 市民全体に対するアプローチ

市民の内面（ソフト）「シビックプライドの醸成」（岩井）

都市計画（ハード）「中心市街地活性化に向けた公共空間の在り方」（板橋）

■ 既存プレイヤーに対するアプローチ

包括「地域文化の担い手としての中小企業経営者の地元帰還について」（村井）

個別「地域ブランドとしての太田ニットの可能性」（鶴岡）

■ 新規のプレイヤーを育てるアプローチ

新しい文化資産と次世代の育成「群馬クレインサンダーズと高校生」（栗原）

外国人就業者の活用「外国人向けリカレント教育」（真殿）

6名それぞれの着眼点で取り上げる文化資産を特定し、観察と問題定義を行った。

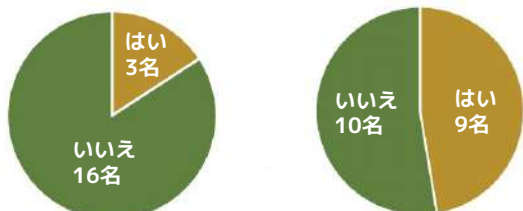
	取り上げる文化資産	観察と問題定義
市民全体	テクノプラザ (岩井)	官民連携の場としてまちづくり市民会議、太田市自分ごと化会議、産官学連携の場としてテクノプラザおたなどを調査。いずれも官主導かつ自動車産業に偏ったものとなっている。産官学民による新産業創出というコンセプトが弱く、テクノプラザが活用仕切れていないのではないかと
	公共空間 (板橋)	「高齢世代」「社会世代」「学生世代」「幼少世代」の4世代に区切り、公共空間とどのように関わりを持っているかを調査。「社会世代」は公共サービスに関する生産活動を担っており、その他の世代は消費活動のみ。老朽化する施設は、サービスの恩恵が「高齢世代」に偏っている
既存プレイヤー	中小企業 (村井)	「太田市から流出した若者が求める職種が地元が少ない」と感じる一方「よその人に太田のことを悪く言われると、やっぱり腹が立つ」と思う地元への複雑な愛着を持つ。工業に対し商業が弱く、先端教育と地場企業への就職との間にギャップがある。若者と女性の流出が課題
	太田ニット (鶴岡)	事業者数が減少し太田市では衰退と思われているニット産業。他産地との比較、聞き取り等の調査を踏まえ「若者や女性も活躍する、ベンチャー精神で技術革新を続ける産業」と再評価し、若本や女性の職業として活用できるのではないかと
新規プレイヤー	群馬クレインサンダース (栗原)	先進的なスポーツ教育及び実業団チームがあり企業都市ならではのスポーツ文化がある。教育ではグローバル人材育成を掲げる反面、高校生の地元定着に問題が。高校生の地元定着に繋げる目的で、群馬クレインサンダースを応援する高校生コミュニティの立ち上げを検討できないかと
	日系ブラジル人コミュニティ (貞殿)	外国人児童生徒への教育体制は充実している一方で、その父母たちは日本語が十分に話せない。日本語を使わなくても困らないコミュニティを形成し、そこで生活をしている。日本語のリカレント教育によって解決し、地域社会にも様々なプラスの影響を与えるのではないかと

6名の個人研究で「聞き取り」「Webアンケート」「インタビュー」「現地調査」などを組み合わせて調査を実施した。

太田ニットにおける例

聞き取りとWebアンケート

太田ニットについての認知度調査



ニットが盛んな地域だと知っているか？

OTA KNITブランドを知っているか？

クラファン利用者へのネット調査2021年12月実施、回答19名)

GAP

太田ニット関係者の課題感・要望

- ・住民にもっと知ってもらいたい
- ・行政からのサポートを期待したい
- ・OTA KNITブランドの知名度を上げたい
- ・若手ニット従事者への支援を増やしたい
- ・商品アイテムの増加、場づくり、若年層の巻き込みなど

ニット事業者への聞き取り調査2021年9月実施、I社、M社、Mebuki)

ニット工場 I社の見学



写真：鶴岡撮影

ブラジル人街現地調査



ZOOMインタビュー等



個人研究による6提案(概要)

提案 産官学民連携モデル

すべてのステークホルダーが
関心あるテーマで連携しながら
自由に活動・学びの機会を得る
ことで「自助で興す力」を再興
する

産
事業者・従業員

- ・ テーマ持込
- ・ 事業開発
- ・ 技術・事業開発教育

民
自分ごと化会議

- ・ ニーズ調査,検証支援
- ・ テーマ持込
- ・ 起業

①産官学民の参加
(コワーキング)

- ・ 関心のあるテーマに
自由に参加,
- ・ コワーキングオフィス

④創業支援

事業計画,資金調達,
事業運営などの支援

テクノプラザおおた
テーマ：工業系事業開発

- ・ 事業開発,創業教育
- ・ 技術教育

テーマ毎にプロジェクト
形式で事業アイデア,
プロトタイプ作成

②事業開発教育

③ワークショップ

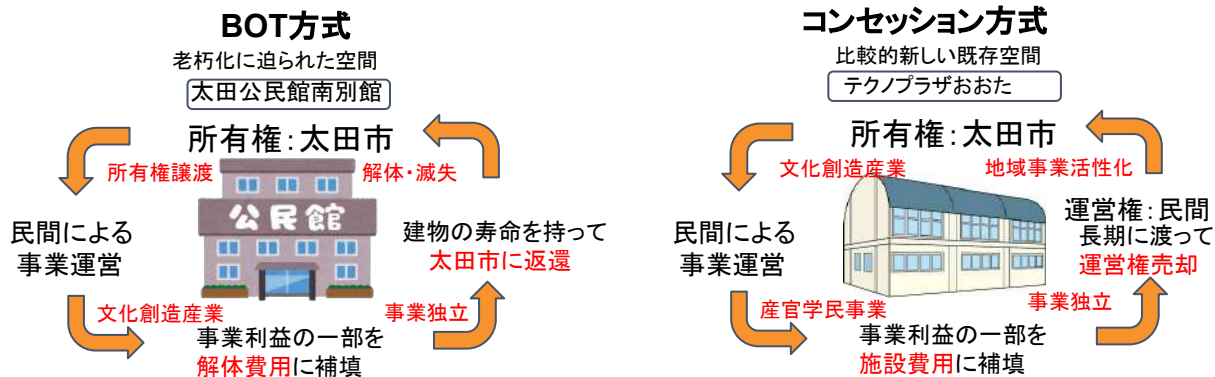
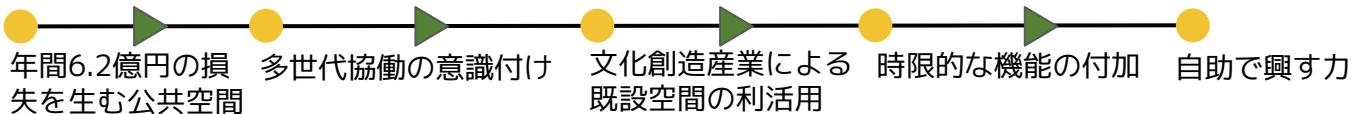
学
群馬大学

- ・ 技術支援
- ・ 教育
- ・ 共同研究

官
太田市/群馬県

- ・ 運営支援,教育
- ・ 事業テーマ提供
- ・ 政策検討

文化創造産業政策と結びつく公共資産の再興



豪華な新規施設建設の抑制と、地元中小企業のチャレンジ促進



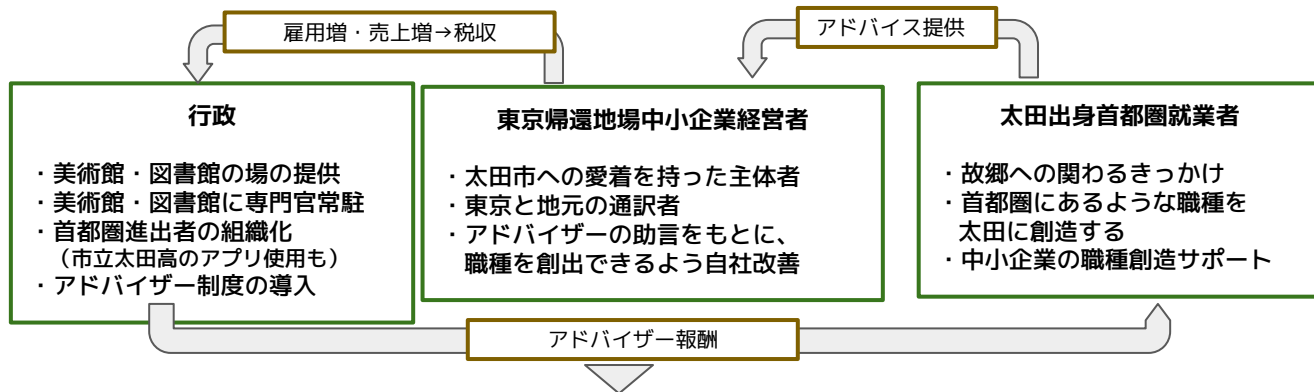
中心市街地に市民の集まる公共空間の創造



インフラだけではない産業とコミュニティの
多極ネットワーク型コンパクトシティ

提案

首都圏就業者をアドバイザーとし、首都圏から帰還した中小企業経営者を「通訳」として、地元で「デザイン・マーケティング系」職種を増やすイノベーションを起こす



- 若者の流出阻止と地域に関心ある移住者の拡大→地場産業の担い手、文化資産の担い手の増加

太田市美術館・図書館

設立趣旨：「ものづくり」を通して育まれてきた太田市民の創造性を、これからの「まちづくり」に活かしていくための拠点となる

中小企業経営者と
アドバイザーの公募

職種切り出しワーク

求人メッセージ作成

求人活動・雇用増

リサーチ

発見

アイデア

プロト

将来的には、美術館・図書館に「クリエイティブキャリアアドバイザー」を常駐設置し
美術館・図書館の知見を地場産業求人・職種イノベに活かす拠点とする

太田ニットと街をつなぐ「コミュニケーション・ポイント」を提案

(3) ニットの体験機会

案) 太田市美術館・図書館でニットづくり体験、地域とニットに関するアイデアを考える機会の創出など【★】



上毛かるたをデザインに組み込んだニットは地域の文化を知るきっかけにも。写真：Mebukiクラウドファンディングより

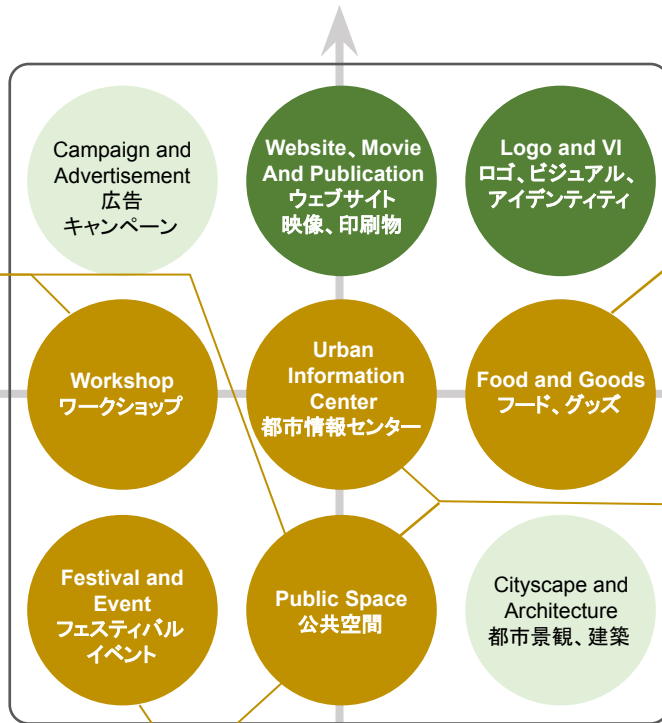
(4) ニットのイベント

案) 完成品の販売だけでなくニットに触れる機会や、桐生・伊勢崎などとの合同イベントも検討できるのではないか。



高崎や渋谷などでもPOPUPを展開
写真：Mebukiクラウドファンディングより

理解する/情報



体験する/空間

(1) ニット活用のグッズ

案) 太田市転入・出産の記念品
群馬クレインサンダーズグッズ
学校制服への採用など



ニットは洋服以外にマスク・バックなど活用用途が広い
写真：鶴岡撮影

(2) 情報発信拠点

案) 太田ニットがわかる情報発信拠点。WG展示やニットに触れる体験など【★】



実際にWGを展示実演、体験できる商業施設（干菓）
写真：鶴岡撮影

地域連携を基本とした具体的提案

SNSコミュニティ

① SNSの活用

- サンダーズが運営するコミュニティサイト（LINE@など新規立ち上げ）
- サンダーズ公式Twitter、Instagram、YouTube、TikTokの企画を高校生が考え、拡散

リアルコミュニティ

② アリーナの活用

- 群馬出身アーティストによるバスケットと絡めたフェスの開催
- バスケ選手・モデルのファッションショー
- ファンクラブ会員はVIPルームをフリースペースとして利用できる（勉強スペース、談話室として利用）
フリーwifi、フリードリンク、印刷無料

③ 郊外活動

- 高校生と選手が一緒に行うボランティア・地元の商品PR活動

④ 商品開発

- 地元の産業をサンダーズと絡め、高校生のアイデアを盛り込んだ商品を開発する

⑤ 就職セミナー・アドバイス

- サンダーズ後援会に加入する企業がコミュニティの高校生に対し、就職に関する有益な情報を提供する

⑥ 企業見学ツアー

- サンダーズのバスを利用し、太田の歴史を含めた企業見学ツアーを行う

期待される効果

高校生の就職意欲向上

- 郷土愛の醸成
- 就職意欲の向上
- 問題解決能力の向上
- 歴史・産業・企業への関心
- 人的ネットワークの構築

高校生の地元定着

持続的な
太田市の発展

誇り、自助による興す力

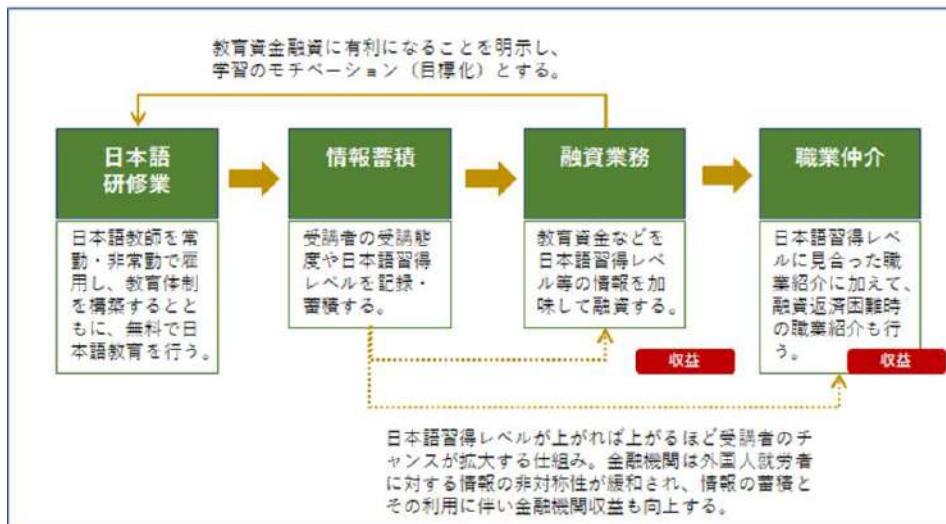
市民・地域・企業を
巻き込んだ活動

- サンダーズの入場者数増加
- 地域活性

外国人就労者向け日本語教育サービスの仕組みを提案

教育資金融資の獲得を具体的目標として提示し、無料でかつオンラインで日本語教育サービスを提供し、更に職業紹介サービスも提供する一体のスキームを考案

新スキームの業務と想定プロセス



明確な目標を提供することで外国人就労者に関する多くの課題を解決する可能性が高い。

学習者の学習態度や学習によって獲得した能力に対して融資するため地方銀行の新しい融資スキーム

収支計画の検証、機械学習により新しい与信判断手法の可能性並びにビジネスの拡張可能性についても検討

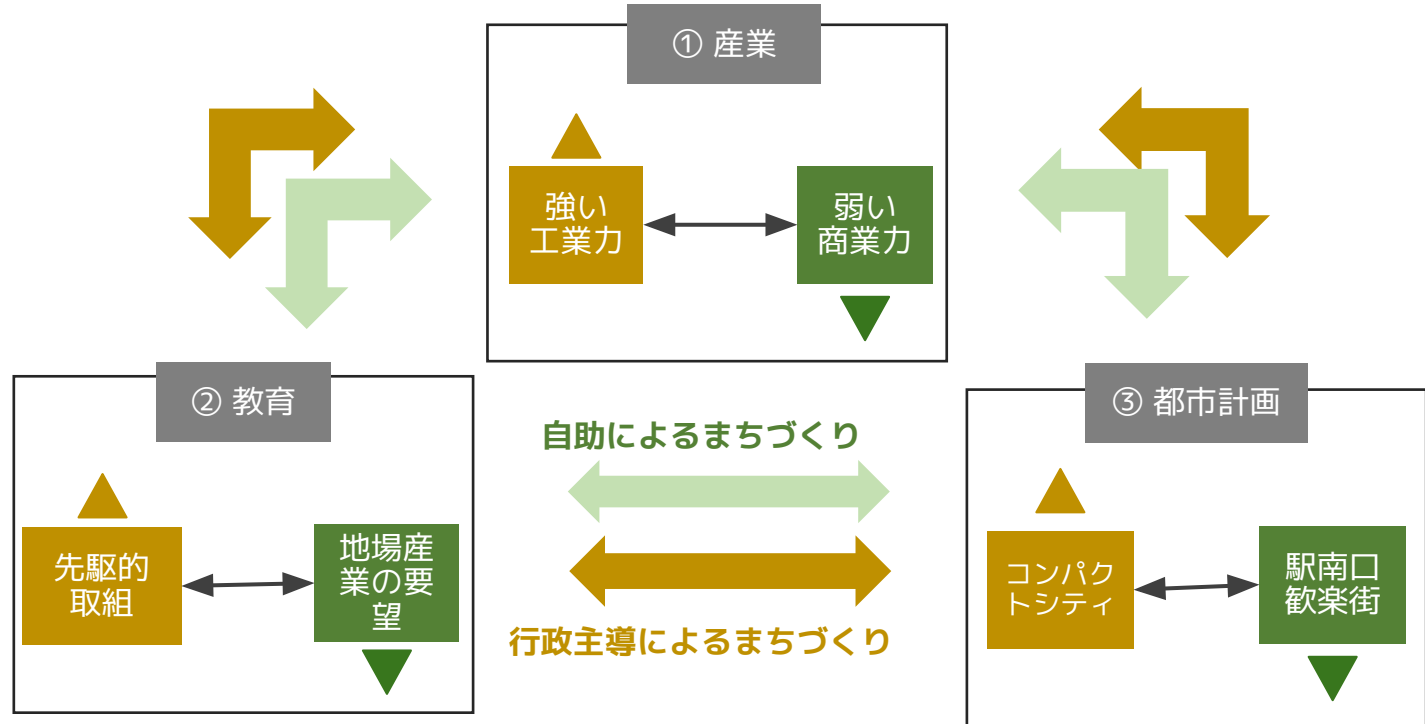
地の章

—太田の未来を考える—



地：「神が降り立つ」
天上から神梯（しんてい）を伝って神が降り立つところを表している。
降り立つところがまさに「地」である。
太田の地から未来に向けて、新たな力を育てていく章。

太田市ではプラス面とマイナス面の対比関係があり、矛盾や問題を起こしている。



歴史的には「自助で興すまちづくり」で発展してきたが
現代はSUBARU中心を前提とした「行政主導のまちづくり」
GAPのある二重ループ構造が太田市の特徴

「自助で興す力」を取り戻すことを目的にした文化資産の利活用案

文化資産	主体	利活用案
公共空間 (岩井)	産官学民	公共空間を各主体が連結する場とし、それぞれの問題意識・意図を融合させることで事業を創造する
公共空間 (板橋)	全太田市民 (多世代協働)	「文化創造産業」を展開することで中心市街地の活性化と持続可能なコンパクトシティを実現させる
中小企業 (村井)	中小企業経営者 東京進出者	美術館をセンターとして、中小企業経営者と東京進出者が協力し、若者や女性に魅力ある職種を創造
太田ニット (鶴岡)	ニット従事者 若者・女性	「産業を活用した地域ブランディング」で、「働く人」と「暮らす人」の誇りが輝き交流が生まれる
群馬クレイン サンダーズ (栗原)	高校生	高校生コミュニティを立ち上げ、サンダーズと絡めた提案を行うことで高校生の地元定着(就職)を図る
日系ブラジル人コ ミュニティ (真殿)	外国人・日本語 教師・金融関係	無料オンライン日本語教育の提供により、良質な労働力の育成と地域ビジネスの活性化を図る

- 直接的効果
- 間接的効果

文化資産	① 産業	② 教育	③ 都市計画
公共空間（岩井）	●	●	●
公共空間（板橋）	●	●	●
中小企業（村井）	●	●	●
太田ニット（鶴岡）	●	●	●
群馬クレイン サンダース（栗原）	●	●	●
日系ブラジル人コ ミュニティ（真殿）	●	●	●

産業、教育、都市計画に対して、個別研究は直接的・間接的に効果を及ぼす。

- 強く連携する施策
- 連結の可能性あり

【アクションプランの相互連携】

	テクノプラザ (岩井)	公共空間 (板橋)	職種創出 (村井)	太田ニット (鶴岡)	プロバスケ (栗原)	日本語教育 (真殿)
テクノプラザ (岩井)		●	●	●	●	●
公共空間の活用、美術館との連携、地場産業やニット、スポーツの事業アイデア、若者、女性、高校生、外国人の巻き込みなど						
公共空間 (板橋)	●		●	●	●	●
豪華な新規施設の抑制と、中小企業のチャレンジ促進、中心市街地の賑わい、アリーナや日本語学校の維持設置、コミュニティの多極ネットワーク型コンパクトシティ						
職種創出 (村井)	●	●		●	●	●
テクノプラザと美術館・図書館の連携、ニットブランディングが職種創出の具体例に、高校生の地元愛着促進、スポーツ、語学サービス分野での雇用創出						

- 強く連携する施策
- 連結の可能性あり

【アクションプランの相互連携】

	テクノプラザ (岩井)	公共空間 (板橋)	職種創出 (村井)	太田ニット (鶴岡)	プロバスケ (栗原)	日本語教育 (真殿)
太田ニット (鶴岡)	●	●	●	/	●	●
テクノプラザでの創業支援、ニットのブランド化の過程でデザインやマーケティング職種が創出、ニット商品の地元活用、ニットを軸にした市民の新たなコミュニティ創生						
プロバスケ (栗原)	●	●	●	●	/	●
インフラとしてのアリーナ、職種の創出、高校生の地元定着促進、スポーツビジネスの新規雇用、太田ニットのコラボレーション、外国人との関わり						
日本語教育 (真殿)	●	●	●	●	●	/
外国人との関わりでの醸成、女性の就業機会の提供、地方金融機関の融資・職業仲介ビジネスの拡大、外国人労働者の増加による人手不足業種への人材供給及び起業可能性の拡大、ソーシャルビジネスの発展可能性						

- 強く連携する施策
- 連結の可能性あり

【アクションプランの相互連携】一覧

	テクノプラザ (岩井)	公共空間 (板橋)	職種創出 (村井)	太田ニット (鶴岡)	プロバスケ (栗原)	日本語教育 (真殿)
テクノプラザ (岩井)		●	●	●	●	●
公共空間 (板橋)	●		●	●	●	●
職種創出 (村井)	●	●		●	●	●
太田ニット (鶴岡)	●	●	●		●	●
プロバスケ (栗原)	●	●	●	●		●
日本語教育 (真殿)	●	●	●	●	●	

未来の文化資産の利活用案を実施することで、太田市にもたらすメリットや変化を整理する。

地域の 具体的な変化

6つの利活用案が実現すると、公共空間の連結利用や文化創造事業の創出は、コンパクトシティ時代の新しいモデルとなり、太田市美術館・図書館は創業支援の知的センターになり、ニット産業による新しい地元振興モデルも生まれるであろう。また、群馬クレインサンダースは高校生が育てたチームとしてスポーツ界に新しいコンセプトを打ち立て、「ブラジル人が多い街」は、「日本語が上手なブラジル人が生き活きと暮らす街」に変貌を遂げるかもしれない。

本研究のように**太田市のディテールに焦点を当て、地域の具体的な変化を目指す**ことで、平均化しがちな「まちづくり」に新しいアプローチができるのではないか。風土記を作ることによって各人が同じ情報を共有でき、それが共創を生み出しやすくする効果もある。

利活用案の 相互メリット

6つの未来の文化資産の利活用案は関連性があり、**同時に活動**をすることによって情報共有、予算・施設などリソースの共同活用、人の交流によるコミュニティの形成などの面で**相互に利点をもたらす**はずである。

また、多様なプロフィールを持つチームの本研究がそうであるように、一見関連性が低く見えることでも、**共創**により創造的なアイデア、新しい思考のフレームワークなどが生み出されることも期待できる。

今後の展開

現代版風土記が目指すこと

木田風土記



2022年3月29日太田市役所にて、清水太田市長に提案の機会を得る。

太田市出身ではなく、地域研究の専門でもない研究チームの視点でまとめた『太田風土記』について興味深く聴いていただいた。

太田市長からは各プランについてフィードバックとコメントをいただくとともに、一部については早速行政として提案に組み入れたい前向きな反応があった。

太田風土記

歴史的な文脈に眠る「地域の力」を再発見し 未来へつなぐ道標とするための現代版風土記

『太田風土記』は歴史的な文脈から「地域の力」を探求し、文化資産の利活用による解決策を提案する現代版風土記である。

行政目線の取り組みでは見過ごされがちな細部を、本研究ではデザイン思考を用いて探求するところに特徴がある。「太田市民」とひとまとめにした最大公約数の解決の視点ではなく、ある特定の住民の立場に立った観察を積み上げることで、地に足のついた提案を行うことを心掛けた。

今後は『太田風土記』のさらなる研究を進めるとともに、他の都市における課題特定や研究を検討していきたい。